

海を詠う

岩井圭也

第八回

三日後の昼前、銀座に足を運んだ。その日、伊藤さんが打ち合わせのために午前中から文芸レビュー社に顔を出すことは、兄から聞いていた。

屋根裏部屋に顔を出すと、兄や伊藤さんら同人の男の人たちが六人集まって、今後の雑誌の方針を話し合っていた。お酒が入るとにぎやかなのだけれど、きょうはいつになく空気が沈んでいる。真っ先に茶化すようなことを言う衣巻さんも、難しい顔でむつつりとして見りこんでいた。場の空気を壊さぬよう、部屋の隅で小さくなって見守った。

「……ぼくは、悪くないと思うんだが」

沈黙を破ったのは、文芸レビュー社の首領である兄だった。話の方向が見えないが、とても口をはさめる雰囲気ではない。

「永松ながまつのことは、きみらもよく知っているだろう。彼らは信用できるよ」

「だとしても、合流は時期尚早だ」

衣巻さんが拳を畳に打ちつけた。

「われわれには、〈文芸レビュー〉としてやるべきことが残っているんじゃないか」

「ぼくは隘路あいろに入りこんだと思っている」

「〈ヴァリエテ〉をつくったのも、〈文芸レビュー〉を見捨てるためか？」

「関係ない。ぼくはただ、合流したほうが飛躍できると考えている」

しばらく聞いていると、話が見えてきた。どうやら兄たちは、永松定さだむという人たちが主宰する雑誌〈風車ふうしゃ〉と合流すべきか否か、を話し合っているらしい。提言したのは兄で、同人の多くは難色を示しているようだ。

たしかに早すぎる気もする。〈文芸レビュー〉の創刊からまだ一年少々であり、安易あんいに他の団体と合流すれば、文学的な変節とも捉えられかねない。しかし一年が決して短い期間ではないことも、わかっていた。同人雑誌のなかには、一号や二号で終わってしまうものも少なくない。一年続いたんだから十分、という見方もある。なによ、金銭的な苦境を踏まえれば、母体を大きくすることは有利に働くはずだった。今後の活動に〈風車〉の予算も使えるのだとすれば、経営を担う兄としてはありがたいだろう。

「伊藤はどう思う？」

畳の上に、衣巻さんの唾が飛んだ。腕を組んだ伊藤さんは「昇」と呼びかけた。

「もう少し時間をくれないか」

「どれくらい？」

「半年。それで立ち行かなければ、合流しよう」

兄は目を閉じ、半端に伸びた坊主頭を搔いて、「わかった」と応じた。

「来年の春、また話そう」

そのひと言で座が弛緩しかんした。衣巻さんはおおげさに息を吐いて、

「〈文芸レビュー〉がなくなるところだった」と軽口を叩いた。

置き物のように気配を消していたわたしを、伊藤さんが「ちかちやん」と呼んだ。

「次の号には、きみの作品も掲載したい」

「えっ？」

ずいぶん急な提案だった。兄も眉を上げて「いいのか」と言う。

「もちろん。〈ヴァリエテ〉や〈白紙〉で頑張っているのは、知っているから」

喜びより戸惑とまどいが勝ち、「はあ」と応じるしかなかった。つい最近

まで、伊藤さんはわたしの詩を詩と認めていなかったはずだ。それがなぜ——疑問は、目尻に皺しわを寄せた兄の顔を見たときに氷解し

た。

伊藤さんにとって編集権を持つ〈文芸レビュー〉は、自分の城と言ってもいい。その〈文芸レビュー〉を延命させるためには、経営を担う兄をその気にさせなければならない。そのために、妹であるわたしの詩を載せることにした。要は懐柔だ。兄のご機嫌取りのために、利用されたのだ。

そこまでわかってもお、怒りは湧かなかった。たとえどんな理由でも、伊藤さんがわたしの詩を選んでくれたのがうれしかったから。

話し合いが終わり、昼飯を食いに行こう、という段になって、伊藤さんにぴたりと身体をくっつけた。

「もう帰りませんか」と耳元でささやく。

「昼飯は？」

「食事なんてどうとでもなるでしょう？ それよりわたし、翻訳を教えてほしいんです。先日、見てもらえなかったんですから」

兄や他の同人仲間たちが、ちらちらとこちらを見ていた。構うものか。むしろ、密着するわたしたちを存分に見てほしい。ふたりはただならぬ仲なんじゃないかと、声高に噂してほしい。

「整はどうする？」と兄が急かすように訊いた。

「そうだな……きょうのところは帰るよ」

やった、と小さくつぶやく。兄は「なら先に行くぞ」と階段を下りていった。たぶん兄はいまでも、わたしが少女時代の延長として、伊藤さんを好いているのだと信じている。肉体の関係があるなんて想像すらしていない。他の人たちも、兄の後に続いて屋根裏部屋を出ていった。

ふたりきりになった三畳間に、くっついたまま座りこんだ。伊藤さんの右腕を抱え、肩に頭をもたれさせる。

「うれしかったです」

「なにが？」

「わたしの詩、載せてくれること」

伊藤さんはなぜか渋い顔で「うん」と言った。

「認めてくれたんですね」

答えは否だと知っていて、あえて尋ねた。伊藤さんは無表情になり、それから微笑を顔に貼り付けた。お互い、嘘がうまくなった。

わたしは伊藤さんの腕を取ったまま、二階へ下りた。部屋の扉が開いて、シャツを着た男性が姿を現した。黒髪を後ろになでつけているのは、北園さんだった。

最初に北園さんと伊藤さんの目が合った。続いて、北園さんはわたしを見た。少し驚くような、いぶかるような視線だった。足を止めた北園さんは、「伊藤か」と言った。伊藤さんは「どうも」と応じた。

会話はそれだけだった。

一階への階段を下りかけたとき、ふと振り向くと、北園さんはまだこちらを見ていた。なにかを忠告するような視線だった。

わたしは伊藤さんの肘あたりをつかんだまま、小さく会釈をして、前に向き直った。

買い物にでも出ているのか、和田堀町のアパートに貞子さんはいなかった。部屋には、三日前に訪れたときよりも彼女の持ち物が増えていた。ちゃぶ台の上の黄色味がかった便箋も、錆色の櫛も、ひとりで暮らしていたときには見かけなかった。立ち流しの台所には、やたらと白い洋食器が置かれていた。

「疲れたね」

伊藤さんは窓の下にあぐらをかいた。お茶でも淹れようかと思っただけど、あえてしなかった。わたしは妻ではないのだ、という妙な自尊心が働いた。きびきび立ち働くのは役目ではない。代わりに伊藤さんのすぐ横に腰を下ろし、しなだれかかる。向こうは抵抗しなかった。

「わたし、うんという詩を書きますから」

「そうしてくれ」

宙を見つめる伊藤さんの目は、虚ろ^{うつろ}だった。本当の意味で、彼はわ

たしも貞子さんも見ていない。兄のことも仲間のことも眼中にない。伊藤さんが見つめているものがなにか、わたしには薄々わかってきた。

伊藤さんが見ているのは、伊藤さん自身だった。

彼は周囲の人物を鏡の代わりにして、そこに映りこんだ自分だけを凝視している。わたしに翻訳を教えているときも、やわらかい微笑を向けているときも、布団のなかで乱暴に抱いているときも、伊藤さんは伊藤さんの世界に閉じこもっている。そこに他者が入りこむことは、決してない。

それでも構わなかった。どうせ誰も入れないのだから、嫉妬しとする必要もない。わたしは間近で、伊藤さんの心がくすぶるさまを観察できれば十分だった。

扉が開いて、風呂敷包みをした貞子さんが現れた。

「ただいま……」

わたしを視界にとらえた瞬間、言葉が途切れた。

「お邪魔しています」

われながら、ねっとり糸を引くような声だった。伊藤さんが鷹お揚うに「おかえり」と言う。貞子さんが頬を引きつらせた。

「川崎愛さん、ね？」

「はい。左川ちかです」

伊藤さんが考えてくれた左川ちかの名を名乗ることで、心の空白が埋められていくのがわかった。

風呂敷包みを解き、小物を片付けた貞子さんは、身の置きどころがなさそうに室内を見渡した。なにも言わない伊藤さんをじつと見てから、わたしたちと距離を取るように寝室の隅で足を崩した。こみあげる笑いを、我慢できなかった。

——そこで黙って見ているといい。

「ねえ、伊藤さん」

「うん？」

「わたし、余市よいちから出てきて本当によかったと思うの」

「そうかい」

「だってこんなにも、伊藤さんの近くにいられるから」

「それは光栄だね」

考えごとでもしているのか、返ってくるのは生返事ばかりだった。

それでも、貞子さんの顔を紅潮させるには十分な効果があった。大理石のように白い肌が、少しずつ朱に染まっていく。

それからしばらく、文芸レビューの仲間の噂話ばかり選んで話した。話に登場するのは、貞子さんとは縁もゆかりもない人物ばかりだった。向こうには聞こえないくらいの声でひそひそと話し、ときおり派手に笑い声を立てた。伊藤さんの二の腕に頬を寄せ、つまさ

きをくつつけた。伊藤さんは終始うわの空だった。

貞子さんの顔は見なかった。見なくとも、内心はわかった。

「伊藤さん。みかん、食べたありません？」

「季節外れだろう」

「そうなの？ でも、食べたくなっちゃった。早生わせのみかんなら出回っているかも」

ううん、面倒くさそうに顔をそらせた伊藤さんが、「貞子」と呼んだ。貞子さんが期待のこもった目で「はい」と返事した。

「悪いけど、みかんを買ってきてくれないか」

「……はい？」

「ちかちゃんが、食べたいって言ってきかないんだ」

そのときの貞子さんの顔は、たぶん死ぬまで忘れない。目が丸く見開かれ、黒目が胡麻粒ごまつぶのように小さくなった。控えめな小鼻が隆起し、紅もさしていないのに唇が赤かった。いまにも歯ぎしりの音が聞こえてきそうだった。

「でも……みかんなんて」

「ないならいいから。少し見えてきて、売ってなければ帰ってきてくれ」

貞子さんは最後まで話を聞かず、立ち上がった。そのままひと言も発さず、部屋を出ていった。閉まっていく扉の向こうに、うつすら

と涙の影が見え、心がちくりと痛んだ。だがそれも一瞬のことだった。

「よかったんですか？」

伊藤さんは悪びれもせず、鼻を鳴らした。

「きみが望んだことだろう」

かつ、と頭に血が上った。まるでわたしにすべての責任を押しつけるような言い方だった。

「伊藤さんは、食べたくなかったんですか。みかん」

「ぼくはきみじゃないから」

会話はそれきりだった。

——なにを考えているんですか？

訊いたところで無駄であることは明白だった。これほど近くにいるのに、伊藤さんはわたしのそばにいない。詮せんないことだとわかっていながら、伊藤さんの腕に胸を押し当てずにいられなかった。

鈴を転がすような音が、庭から聞こえた。夜の虫が鳴いている。すでに夜更よふけと呼んでいい時刻だった。ひやりとした夜気が秋のはじまりを伝えていた。

何度書き直したかわからない詩を、わたしは原稿用紙に清書していた。

海を書こう、と思ったのは、あの揺り椅子のせいだった。耳にこびりついた波音の幻聴は、あの後もときおり聞こえてきた。隙間風の吹く家で聞いた、遠い潮騒しおさざい。海の気配など微塵みじんもない都市のまんなかで、わたしは余市の海に憑つかれていた。温かな記憶などない。思い出すのは、寒々しく荒れた灰色の海だった。

赤い騒擾そうじょうが起る

夕方には太陽は海と共に死んでしまふ。そのあとを衣服が流れ波は捕へることが出来ない。

私の眼のそばから海は青い道をつくる。その下には無数の華麗しがいな死骸が埋つてゐる。疲れた女達の一群の消滅。足跡をあわててかくす船がある

そこには何も住んでゐない。

題は決まっていた。〈墜ちる海〉だ。

余市に素敵な記憶など、なにひとつないはずだった。それなのに、ふと気を抜けば故郷のことばかり考えていた。網膜を刺す緑、会津あいつ長屋ながやのうらぶれた建物、白く曇った空、そして海。

わたしはすべてを忘れ、海の捨て子になって東京に流れ着いた。そしていま詩を書いている。望んだ夢に近づいている。それなのに、どうしてこうも虚むなしいのだろう。

ペンを置き、両頬を手ではさんだ。

伊藤さんの無気力な顔や、貞子さんの憤怒ふんぬにまみれた顔が、余市の光景に重なる。どちらが現実の風景なのか、わからなくなる。どちらも本物だし、どちらも偽者だった。わたしの書く詩だけが本物だった。

——この詩は傑作だ。

〈青い馬〉を読んだ北園さんは、迷いのない目で断言した。正直に言おう。百田さんや兄に褒められたときよりも、あの瞬間のほうが、ずっとうれしかった。わたしに対する感情に混じりけがなかったから。北園さんの恋人になろうとは思わない。でも、同人にならなれるかもしれない。

更ふけていく夜の底で、思考はますます冴さえていた。

〈つづく〉